

和歌山市中島方言の比喩語について

江川克弘・井上博文

はじめに

- (1) 調査地の概要：和歌山市は、紀伊半島の西側の付根に位置し、商都大阪市から阪和線・南海本線で約1時間（特急）の距離にある。和歌山市中島は、もと海草郡宮前村に属し、昭和8年6月に和歌山市に宮前村が編入された。現在の中島は、戸数約350戸・人口約1000人で、その多くが兼業農家である。
- (2) 調査年月日：①平成5年4月8日（9:00～10:30）
②平成5年4月20日（18:00～19:20）
- (3) 教示者：江川一枝氏（f. M. 41）^註
- (4) 調査者・調査場所：江川克弘（教示者の孫）・教示者宅
- (5) 調査方法（分担）・調査時の様子：まず、事前に打ち合わせを行い、調査票にそって江川が調査を行なった。録音テープを井上が聴き文字化を行い、検討して、いくつかの問題点を江川が再調査した。その際に、杉村楚人冠『和歌山方言集』（1975 国書刊行会）所収の比喩語を提示し、使用の有無を確かめた。原稿化は井上が担当した。調査時は終始なごやかであり、一生懸命に思い出して回答してくださった。
（注）「女性で明治41年生まれ」であることを表している。）

I. 自然現象

- 1 日照り雨 キチュネノヨメイリ（狐の嫁入り） ○ヒー¹ 'テ'ッテンノニ ア'メフツ¹テン'ニャ'ロー。（f. M. 41）¹が照っているのに雨¹が降っているのだらう、ヒアタリアヌ（陽当たり雨）とも。
- 2 入道雲 ニュードーダモ ○ワー'ト 'デテ'クル。（f. M. 41）
- 3 旋風 マイカデ（舞風）
- 4 霜柱 シモバシラ
- 5 つらら ツララ
- 6 北斗七星 ホクトヒチセー
- 7 昴 特に言わない。星はホッサン・ホッツァンと言う。○ホッ'ツァンノ コ'ト'ワカナ。 （f. M. 41）¹星さんのことは分らない。
- 8 流れ星 テジビ（天火） 大きな流れ星 ○テン'ビ ト'ンダー。（f. M. 41）
ナガレボシ<新>

II. 動物

- 9 かわはぎ カハギ
- 10 ひらめ ヒラメ
- 11 ひきがえる ゴ下・ゴ下ヒキ ○ゴ'ト' イ'テ'ルロー。（f. M. 41）
- 12 青大将 クチチワ・クチチー 腐った縄に見立てた。○ク'チナー' イ'テ'ルロー'。（f. M. 41）¹靱帯¹がある。
- 13 とかげ トワケ
- 14 かまきり ハタヨリ（機織り） 手の動きを機織りのさまに見立てた。
- 15 みずすまし 知らない。

- 16 きつつき キツツキ
 17 せきれい コメツツキ 尻尾の動きを米を搗くさまに譬えた。セキレイ<新>
 18 ふくろう フクロ-

III. 植物

- 19 馬鈴薯 ジャガイモ
 20 とうもろこし ナンバ
 21 いんげん豆 インゲン、ニロママ・ニドママ (二度豆) 収穫が二回だから。
 ○ニカ¹イ ト¹レ¹ン ネ¹ン。ハ¹ル¹ト ア¹キ¹ト¹ニ。ソ¹イ¹デ ニ¹ド マメ。
 (f. M. 41) 二回とれるんだよ、秋と春と、それでニドマ(と語)、トーロク・トーロクマメとも。
 22 そら豆 トママ (唐豆)
 23 木くらげ キクラケ
 24 げんのしょうこ ゲンノショコ・ゲンノシヨコ ○コレ¹ イ¹チョ¹ーノクス¹
 リニ ナ。 (f. M. 41) これ胃腸の薬なる。
 25 ぞくだみ 下クダミ・下クダミ
 26 いたどり アチボツチン・アチツボ 茎が中空になっているから。
 27 からすうり カラスノウリ (烏の瓜)
 28 すみれ スミデ・スミレ (スは [t'u])
 29 春蘭 オキクトボズ (お菊と坊主) ○(花を見ると) オ¹ト¹コト オ¹ン¹ナ
 トミ¹タ¹イニ ナッ¹チャ¹ンジャシ¹ ヨ。ホ¹デ¹ オ¹キ¹ク¹ ボー¹スト¹ユ
 ワー。 (f. M. 41) 男と女とみだれているんだよ、それでお菊と語よ。
 30 母子草 知らない。
 31 ねむの木 ネムリグサ (眠り草)

IV. 性向

- 32 熱しやすく冷めやすい人 アキショー (飽き性)
 33 あわてん坊 ガサツボ・ガサ ○ガ¹サガ¹サ スルヤロ¹ー。ソ¹レ¹デ ガ¹サツ¹ボ
 ー¹チュ¹ーン¹ ユ¹ー¹ン ヨ。 (f. M. 41) 男と女とすがる、それでガサツと語んだよ。
 34 動作の鈍い人 ノロ
 35 嘘つき センミツ (千三) 千に三つしか本当のことがないから。
 ○シェン ユ¹ー¹テ¹モ¹ ネ¹ー。ミッ¹ツシカ ホンマノ¹コト ナイ
 'ネ¹ン。 (f. M. 41) 千言ても嘘、三しか本当のことがないんだよ、ウソツキとも。
 36 ほらふき ホラフキ (法螺吹き)
 37 おしゃべり スズメ (雀) 雀がうるさく鳴いているさまに譬えた。
 ヒバリ (雲雀) ○ヨ¹ー 'サイズ¹ルサカ¹イ。デ ヒバ¹リ¹ヤ¹チュ¹テ。
 (f. M. 41) よく鳴るから、それで雲雀と語て、シャズリ<盛>とも。
 38 冗談言い オロゲンボ¹ー・オドケ、ジョテ
 39 口先だけの人 クチバツカイ ○ア¹レ¹ワ モ クチ¹バツカ¹イヤ。
 (f. M. 41) 彼は、口だけだ。
 40 とんちんかんなことを言う人 クチカラデマワセ (口から出まかせ)
 41 のらりくらり煮えきらない人 プラリケラリ スル
 42 怒りっぽい人 オコロ
 43 気むらな人 アキノソラ (秋の空) 秋はよく天気が変わるから。

- 44 泣き虫 ナキミソ、ナキムシ<新>
 45 おてんば娘 ジャジャウマ・ジャジャンマ・ジャジャンマムスメ、ハッサイ
 46 腕白坊主 ヤクラボシ (やくざ法師)、テニ オイヤン コー (手に負えない子)
 47 出しゃばり デチャバリ
 48 どこへでも顔を出す人 デチャバリ
 49 家にこもって外出しない人 ミソオテ (味噌桶) 味噌桶はいつも家の中の暗い所に置いてあるから。○ミソオ¹ケ¹チュ¹ノ¹ワ¹ ¹ネ¹。ク¹ラ¹イ トコレイ¹チュ¹エ¹デモ イテルサ¹カイヤロ¹。 (f. M. 41) ミソオというのはいつも暗い所にいるか
 50 小心者 オジケモン、シヨ¹シ¹ン¹モン
 51 内弁慶 ウチベンケー (内弁慶)・ウチベンケーノ ソ下ネズミ (内弁慶の外鼠)
 52 人づきあいをしない人、社交性のない人 ヘンジン (変人)
 53 妻に対して頭の上がない男 (方方デンカ)
 54 けち シブ・シブイ、ケチ・ケチンボ
 55 欲張り ヨクバリ

V. 食生活

- 56 大食漢 イッショ¹メシ (一升飯)、ライスケ (食い助)
 57 ぼたもち ボタモチ ○ボ¹タ¹ボタ¹ シ¹テ¹ルヤ¹ロ。ア¹ン ツ¹ケ¹テ。
 (f. M. 41) 食べているだろう、熊を捕て。
 58 砂糖味が薄い サ下ヤブ カド ホッカブリ (砂糖屋の角、頬杖)
 ○デンダ¹イガ¹ ウ¹ズカ¹ッタラ¹ ¹ネ¹。ホシタラー ¹サトヤノカ¹ド ¹ホッ
 カブリテ¹ ¹ヨ¹ー ¹ユ¹ー¹タ。 (f. M. 41) ほんざいがかつたらねえ、砂糖屋の角裏りとよく言った。
 59 塩味が薄い ミズグツア¹イ (水くさい)
 60 大酒飲み オ¹ザケ¹フミ
 61 酒に酔ってくだをまく ヨイツブレ、ヨッバライ (酔っ払い)
 62 酒に酔って顔が赤くなる、そのさま テンビ ミタイナ (天火みたいな →8)

VI. 動作・様態

- 63 恥ずかしくて顔が赤くなる、そのさま アゴ ナッタ (赤くなった)、モキメン
 (赤面)
 64 どしゃ降りの雨 ドシャブリ ○キョ¹ウ ドシャブ¹リ¹ヤ ¹ナー。 (f. M. 41)
 65 ずぶ濡れ・びしょ濡れになる、そのさま ビシャビシャ ○ア¹メ¹デ ビシャビ
 シャ¹ニ¹ ナッ¹タ ¹ナー。 (f. M. 41)
 66 服装がだらしないさま グラシチイ
 67 髭がのび放題なさま グマミタイナ (熊みたいな)
 68 厚化粧をしている人 コ¹ニ ヌツチャル (濃く塗ってある)
 69 背丈の高い人 アッポ
 70 出びたい デテゴンヌ ○ヨ¹ー ¹デ¹チャル¹テ ¹デ¹テゴン¹ ¹ス¹チュ¹ ワ¹。
 (f. M. 41) (顔)よく出ていると、テゴシと語よ。
 71 汗がひたいから流れ落ちる アセ ナガレル (汗流れる)
 72 目を丸くする ヌ¹トビ¹デ¹タ (目が飛び出た) ○ア¹ー ビッ¹ク¹リ シタ
¹ヨ¹ー。¹メ¹ー ¹ト¹ビ¹デ¹タ ¹ヨ。 (f. M. 41) ああ、びっくりしたよ、目が飛び出たよ。

- 73 口をとがらす チョボク^チ、クチ トンガラカス
 74 焦げ臭いにおい コケ^クサ^イ、カクベグサ^イ
 75 遠回り(を)する ト^マワリ ○キョ^ーワ ト^マワリシテ キテ^ー
 ク^タブレター。(f. M. 41) 今日は遠回りしてきてくれた。
 76 未っ子 オソンボ[・]オトンボ
 77 一生懸命頑張る コ^ーセニスル(豪勢にする) ○ゴ^ーセニ シ^ゴトスル ヒト^ー
 'ネ^ー。アノ ヒト 'ゴ^ーセニモンヤ ナ^ー。(f. M. 41) 一生懸命に仕事する人はねえ。
 働き者だね(と誇)

VII. その他(調査票以外)

(1) 自然現象・動物・植物

- 78 三月の中頃に急に寒くなるさま タキキ^アア^ー(薪の能) ○ナ^ラデ オミズ^ー
 ト^リ アラッ^{シヤ}ル。'ア^レオ 'ネ^ー。'タキキ^ノノ^ーヤサカイニ ホ^ー
 イデ ソラ^ー 'タ^ク ユ ワ^ーヨ^ー。(f. M. 41) 奈良でお水とりがなされる。あれをねえ。薪の能だか
 ら、それでそれは(寒くて火を)焚くと誇よ。
 79 猫 ニヤ^{ニヤ}(にゃあにゃあ) <幼児語> 鳴き声の擬音から。
 80 蜜蜂 フン^{フン}(ぶんぶん) <幼児語> 羽音の擬音から。
 81 馬追い スイ^ツチョ 鳴き声の擬音から。
 82 便所虫 セン^チムシ(雪隠虫) 便所にいるから。
 83 おほぼこ ギシ^{ギシ} 花を引っ掛けて引き合って遊ぶ。切れたら負け。
 84 力草 スモ^{トリ}アサ(相撲取り草) 遊びから。

(3) 性向

- 85 人の言いなりになる人 ジュン^サイナ(尊菜な)
 86 人のすることに反対する人 ア^マノジャ^コ(天の邪鬼)
 87 都合のいい方に付く人 マ^タグ^ラゴ^ーヤク(股ぐら膏薬) 両股のどっちにでもく
 っつくから。
 88 つべこべ言う ヘ^ンジョ^コン^コ(遍照金剛) お経の一部。

(4) 食生活

- 89 甘柿 サ^下カ^キ(砂糖柿) 甘いから。
 90 旧暦八朔に作る餅 ニ^ヲモチ(苦餅) 八朔から夜仕事を始める習慣があり、苦々
 しく思うところから。○オ^トコ^{シヤ} オ^ナゴ^{シラ}オ オ^イテ ア^ツタラ
 'ネ^ー。'バン^ニアノ 'ユ^ーゴ^ハン^オ タ^ベテカラ^ネ。シ^ゴト サ
 'ス^ンヤチ^ヨ。'ホ^イテ' ソノ モ^チ タ^ベタラ^ネ。アノ
 ナ^ニヤ^イジャ。シ^ゴト 'セ^ンナ^サカ^イ 'ネ^ー。'ソ^レニ^カモチ^チ
 ユ^ータ。 f. M. 41) 男衆や女衆たちをおいてあったらね。晩にあの夕ご飯を食べてからね。仕事をさせるんだよ。そして、その餅を食べた
 らね。あのなんだよ。仕事をしなければならぬからねえ。それをニガモチと言った。
 91 いなり寿司 キ^ツネズ^シ(狐寿司)、コ^ンコ^ン(ズシ)(こんこん(寿司)) 狐の
 鳴き声の擬音。
 92 押し寿司 オ^シヌ^キ(押し抜き)、コ^ケラ(ズシ)とも。
 93 五目寿司 カ^キマ^テ(掻き混ぜ)
 94 そら豆を煎ったお菓子 オ^タフ^グマ^メ(お多福豆) 形がお多福に似ているから。

- 95 お菓子の一種 ショーガイダ (生姜板) 山椒や生姜を入れた四角な板状のお菓子。
 96 駄菓子の一種 ネコフクツ (猫の糞) その色と形から。
 97 料理の一種 イ下ゴ三 (従兄煮?) 大根・人参・里芋・油揚げ・・・等々を一緒に煮込んだもの。

(5) 動作・様態

- 98 ほったらかしたままにする シリ フカン (尻を拭かない) ○ア¹ノ ヒト 'シ
 'リ フ'カン。(f. M. 41) あの、ほったらかしだ。
 99 便所に行く コーヤマイリ (高野参り)
 100 怒られること タコトウル (蜻蛉釣) 相手が真っ赤になっているさまからか。
 101 山道で急に空腹疲労感を感じて歩けなくなる タ三 ツク ○ヨー 'ネ¹。オ'バ
 -'チャントコエ オ-サカ'カ'ラ 'ネ¹。'ヨ¹- クン'ニヤ'チ ヨ。ホ'イ
 -'タラ モ イ'ゴキヤ'ンヨ-ニ ナッ'テ 'ネ¹。ホ'チェ オ'チャ イッ
 'パイ ノマシテ ヤツタ'ラ 'ネ¹。'ホ'タラ モ- シャンシャン'ニ' ナ
 ン'ニヤ'シ' ヨ。(f. M. 41) よくねえ、おばあちゃんの所へ大坂からねえ、よく(山道して)来たんだよ、そしたらもう動
 けなくなってねえ、それでも茶一杯飲ませてやったらねえ、そしたらもう元気になるんだから。
 102 驚いたときのさま カオワラ ヒー デル (顔から火が出る)
 103 薄気味悪いさま シリ コチヨバイ (尻がくすぐったい)
 104 落ち着かないさま モモヅリ (桃尻?)
 105 美味しいさま アゴ オチル (顎落ちる)
 106 シャがれ声 シオカラゴエ (塩辛声)
 107 量の少ないさま ハナクソホ下 (鼻糞ほど) ○チッ'チャ'イ タ'ベモ'ノ ク'
 レ'タ。'ハナクソ'ホ'ロ' クレタ'チュ' ワ。(f. M. 41) 小さい食物をくれた、鼻糞ほどくれたと言
 うよ。
 108 鈴生子 スズコナリ (鈴生子) ○カキデモ 'ヨ-'ケ ナッチャッ'タ。スズコ'
 ナ'リヤ 'ナ-'チ イ ワ。(f. M. 41) 柿でもたくさん生った、鈴生子だなあと言うよ。
 109 膳を横向きに据えるさま エベスデン (戎膳) ○ア-' エベスデ'ンニ オイチ
 エ アル。(f. M. 41) ああ、横向きに置いてある。
 110 逆さになっているさま サカトンボリ ○サカトンボリニ ナッテ'ル。(f. M. 41)

(6) 身体各部位・形状

- 111 ぼさぼさの頭髮 カツツォ (元僧) ○アノ¹- ヒトノ アタマ 'ガッ'ツォヤ
 ナ-。(f. M. 41) あの人の髪、ぼさぼさだなあ。
 112 歯の一種 チョーチョ (蝶々) 歯の形を蝶々に見立てた。 ○チョ-¹チヨニ
 'ユ-¹テ アル 'ナ-。(f. M. 41) 蝶々に酷似しているなあ。
 113 そばかす ハイノクワ (蠅の糞)
 114 生れつきの黒い歯 ナスビバ (茄子歯) 茄子の色から。
 115 青白いさま ジンジャクナ (腎弱な) ○ア¹ノ ヒト 'ジンジャクナ' カ'オ
 'ヤ 'ナ-。(f. M. 41) あの、青白い顔だなあ。
 116 乳首 チマメ (乳豆)
 117 腸 ヒャクヒロ (百尋) 腸は長いから。
 118 くるぶし ウメボシ (梅干し) 形が似ているから。
 119 腫物 イヌコ (犬子) ○ア-¹ 'イヌ'コ' デキ'タ 'ナ-。(f. M. 41)

(7) その他

- 121 年末に餅つきに来る餅つき屋 ツゴツゴ (搗こう搗こう) 売り声から。
 122 丁稚・小僧 マエガミ (前髪) 丁稚・小僧は前髪を垂らしていたから。
 123 玄孫 ツルノマゴ (鶴の孫) マゴ (孫) / ヒマゴ (曾孫) / ツルノマゴ
 124 女房が亭主より大きい夫婦 ノミフミョー下 (蚤の夫婦)
 125 平泳ぎ カイルオヨギ (蛙泳ぎ)
 126 肩車 カタマ (肩馬)
 127 客席の一番前の席 カブリトウギ (かぶりつき)
 128 水漏れ ザザモリ・ダダモリ (ざあざあ漏り) 擬音から。
 129 水溜まり ビシャビシャ・ビショビショ (びしゃびしゃ) 水溜まりに入った時の
 擬音から。○ハイッタラ 'ピ'チャ'ピ'チャチュ'テ ユー'サカ'イ。(f. M. 41)
 130 マッチ スルビ (磨る火) ○スツ'タ'ラ ヒー デル'サカ'イ。(f. M. 41)
 131 石油 モキタン (石炭) ○オ'バー'チャンラ 'ネ'ー。チツ'ツァ'イ トキマ'
 テ 'デ'ンキ ナカタンヤ'シ ヨ。ホデー 'セ'キタン サイ'ト'ケ ヨー
 チュ'テ。'ダ'ンプニ 'ネ'ー。'セ'キタンオー 'バンニ ナツ'ラ
 'ネ'ー。(f. M. 41) おばあちゃんねえ、おさいまで重さが多かったんだからね、それで石炭をおけよと詰って、ランプか
 え、石炭を敷なつたらねえ。
 132 袂の底にできるゴミのかたまり タモクツオ (袂糞)
 133 正月の飾りの一つ モチバナ (餅花) 米の豊作を祈って、柳の枝に小さな餅をい
 くつかつけた正月の飾り。

まとめ

- (1) 比喩語とそうでないものとの弁別をどうするのか、難しい問題が存する。無論、形状や色彩を利用した直截的な比喩語(表現)であれば、他者(調査者)も追体験(再体験)することによって理解することができる。また、比喩語について話者自身に何らかの語源意識・命名意識が残っておれば、たとえ民間語源(民衆語源)であっても、それを一つの有力な判断の指標とすることもできる。比喩の枠組みとしての、直喩・隠喩・換喩・提喩のうち、後者の二つを認定し区別することも難しく、語(表現)を得ても取り上げるか否か迷ったものが多かった。
- (2) 三月の中旬に急に寒くなるさまを「78 夕キキ'ア'ア (薪の能)」と言う。奈良の興福寺の行事を基にした言い方である。また、便所に行くことを「99 コーヤマイリ (高野参り)」と言う。「高野」は、和歌山県にある高野山金剛峰寺である。こういった事物が登場する点で、近畿という地域性が存する。
- (3) 例えば、「96'ネ'コ'クソ」「107'ハ'ナ'クソ'ホ'下」「113'ハ'イ'ノ'クソ」「132'タ'モ'ク'ツ'オ」のように「クソ(糞)」を形態素に持つ語がいくつも存する。喩材と喩詞との関係の一つとして下降性が見られる。そこには、物事を具体的に身近なものとして把握しようとするとともに、批判や揶揄といった心情を付加する心意傾向を指摘できると思う。

(えがわ かつひろ 大阪教育大学方言研究会4回生
 いのうえ ひろふみ 大阪教育大学)